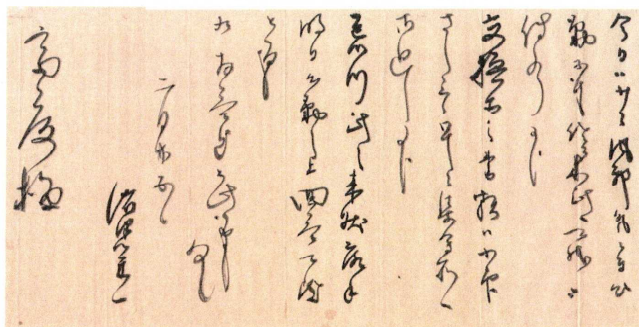


渋沢栄一の書簡

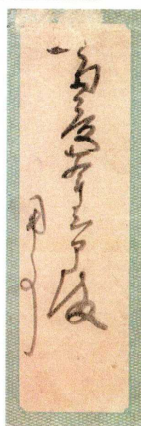
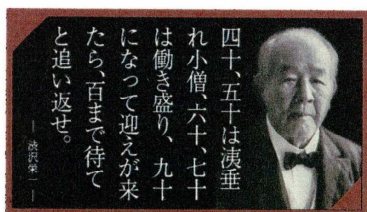


今日ハ少々風邪氣味付出勤不致候佐々木氏へ・・・
御伝聞可被下候
交換所之書類ハ少印
さし上候早々集金所へ
御廻し上候
荒川此之来状落手
明日出勤之上回答・・・
と存候
右 取急・・・如此御座候
二月廿五日
渋沢栄一
斎藤様

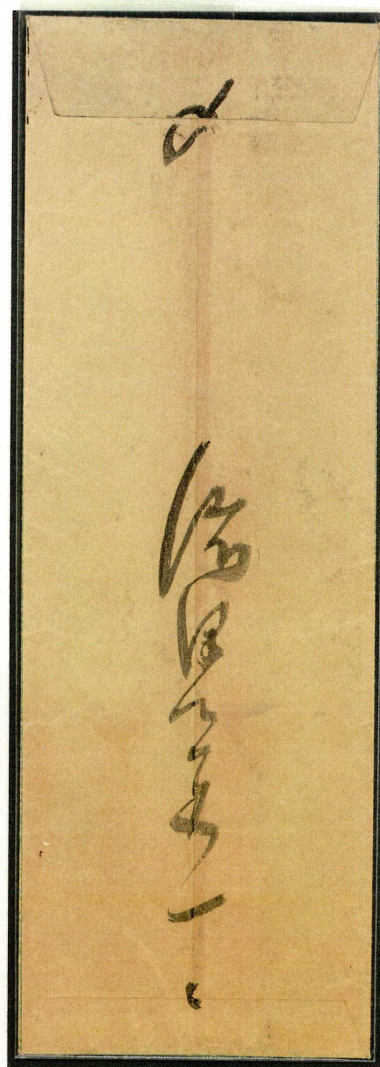
渋沢栄一

生年 天保 11(1840)年 2月 13日
没年 昭和 6(1931)年 11月 11日 (91歳)

実業家。子爵。号は青淵。武蔵榛沢（埼玉県）出身。尊王攘夷運動に参加。明治 2(1869)年新政府に登用され、金融・財政制度の制定・改正に尽力。のち実業界に転じ、第一の国立銀行、王子製紙、日本郵船、日本鉄道などの創立に参画。明治期の日本資本主義の発展に貢献し、社会・教育・文化事業にも尽力した。



斎藤 峯三郎 殿
用事



渋沢栄一の署名

時の人、渋沢栄一が秘書に宛てた、体調不良のための休暇断りと業務伝言と思われる。60の手習いで古文書を読み解こうと努力しているが難しい。だが、面白くもある。宛名の斎藤峯三郎は東京高等師範学校を卒業し、明治 20 年に第一国立銀行に入行、文書課長兼渋沢の秘書役となり、明治 30 年東京海上副支配人に転出している。

時の人、渋沢栄一が明治20年代第一国立銀行時代に秘書に宛てたと思われる書簡である。体調が思わしくなく、業務の遅れを気にしている様子がうかがえる。

北里柴三郎 (1853~1931)

新 1000 円札の顔、熊本・小国出身。「近代日本医学の父」として知られる。重度の肥後もっこすゆえ、国（実質東大医学部とその門下）との対立も辞さずトラブルにも。

ドイツ留学（1885-1891）で細菌学の大家コッホに師事、1889 年にはペーリングと共に世界で初めて破傷風菌の純粋培養に成功。1890 年には世界で最初に血清療法を発見し、破傷風毒素とジフテリア毒素に対する抗血清を開発する。この功績により 1901 年ノーベル賞賞最終候補にまでなるが、結局ペーリングのみがノーベル生理学・医学賞を受賞。



はじめコッホも「ドイツ語が多少できる東洋人」程度の認識のようだったが、その実力と実直な性格から篤い信任を得、北里もまたコッホを尊敬してやまなかった。留学終了時、アメリカやイギリスからも破格の待遇でのオファーがあったが「国の感染症対策に役立ちたい」との思いからこれを全て断って帰国。

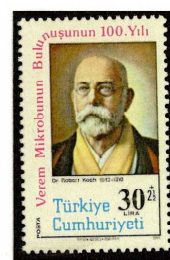


しかし国が北里を用いる動きは鈍く、「これを用いないのは国の損失」と考えた福沢諭吉が出資して伝染病研究所がスタートし、着実に実績を重ねていった。

1914 年に同研究所が文部省に移管され東京大学に合併される沙汰が下されるが、北里はこれに反対して所長を辞任。この時、研究所の全職員が一斉に辞表を提出したと言う痛快事が起こっている。「雷親父」とあだ名されるほど部下にも恐れられていたが、それ以上に尊敬され信頼されていた。同年 11 月 5 日に私費を投じて北里研究所（北里大学の母体）を設立。



北里のライバル(?) 森林太郎 (鷗外)
北里と同じく東大医学部出身。医学者としては比にもならないが、たびたび対立。



コッホさん
すっかり日本最良に



多士済々 秦佐八郎
梅毒の特効薬 サルヴァルサンを開発
赤痢菌の発見者 志賀潔も北里門下
両名とも伝染病研究所移管騒動時には北里と行動を共にする

野口英世も短期だが伝染病研究所
在籍。渡米時の紹介状も北里の筆
その後の活躍はご存じの通り

新1000円札に採用され2回目の日本切手にもなった北里柴三郎。熊本小国出身の細菌学者で日本の伝染病対策に極めて大きな功績のあった偉人です。部下には「かみなりおやじ」と恐れられつつも慕われ続けた彼を軽く紹介させていただきます。

日本（日光）からスイス宛書留航空便

日光 昭和16年4月23日 櫛型消印 裏面到着印 (MOUDON 41.V. 19)

(料金内訳)

印刷便 (imprime) 4 銭 日満間航空料金 (日本～満州・新京間) 75 銭

外国宛書留料金 16 銭 (新京にて国際郵便へ転送のためラベル

HSINKING に貼替)

合計 95 銭

*封筒上は表面 66 銭 裏面 30 銭の 96 銭貼

*昭和15年7月には戦争の影響のため欧州への航空便の取り扱いが不可能となり、シベリア経由の航空便は満州までで、以遠はシベリア鉄道への輸送になる。

*昭和16年6月、独ソ戦の開戦によりシベリア鉄道も運行停止

Ab印・・・ヨーロッパの戦争の影響により、ドイツの検閲印 (Ab) 印が押印

A=外交郵便検査所の頭文字 b=検査所の記号 (ベルリン)



裏面



昭和16年，第2次世界大戦前夜に，日本（日光郵便局）からスイス宛のエンタイアに興味をひかれ，内容を調べたものです。